

<「ネットワーク資料保存」111号、2015.7>  
よみがえれ陸前高田の郷土資料  
—東京都立中央図書館の修復作業—

眞野 節雄

## 1. はじめに

都立中央図書館では、東日本大震災により被災した岩手県陸前高田市立図書館所蔵の郷土資料を修復している。このたび第1次として受け入れた被災資料51点の修復が終わり、平成27年3月に陸前高田に返還した。

51点というささやかな支援ではあったが、都立中央図書館という「修復」現場にくるのは実に多くの人たちの尽力があつてのことだった。以下にその概略を記しておく。

平成 23.3.11 陸前高田市立図書館は津波により蔵書8万冊全てが被災。職員7人全員が犠牲となった。

平成 24.3 車庫跡に山積みされている被災資料のなかから、貴重だと推定される郷土資料約500点が、岩手県立図書館、(公社)日本図書館協会、岩手県内の大学関係者等により発掘、救出。



平成 24.6 救出された資料のうち再入手が困難な資料259点について、搬送先の岩手県立博物館で応急措置を実施(\*1)。

平成 24.8~ 259点のうち、他の県内図書館に所蔵のない62点についてデジタル撮影を実施(\*2)。

平成 25.8 62点のうちその後の再入手もできなかった51点について、陸前高田市から、貴重な資料であり現物を後世に伝えていきたいの

で本格修理をしたいとの意向が示された。本格修理を行うための技術を有する公的機関はごく限られており、依頼を受けて都立中央図書館が協力することとなった。

なお、平成26年5月、これまでに救出された資料とは別に、貴重書庫にあった資料113点が関係者に救出されていたことが判明。同8月に、113点の資料のうち岩手県内図書館で所蔵されていない郷土資料83点を第2次資料として受入。平成28年度末までの予定で修復を行っている。

## 2. 受入れから再生まで

### ■郷土資料受入から再生まで

平成25年9月、岩手県から第1次の被災資料51点が届いた。点検・仕分けをしたのち、撮影→解体→ドライクリーニング→消毒→洗浄→乾燥・平滑化→補修→再製本の順で作業をすすめ、再生させる(\*3)。



洗浄



補修

それから1年半、震災から丸4年。ようやく51点の修復が終わった。丸一年は放置されていたこともあって、どの資料も傷みが激しく、カビ等のため紙が脆弱になっており、作業には細心の注意が必要で、紙全体に極薄の和紙を貼る必要のあるものも多数あった。

## 3. 特別ミニ展示開催

第1次受入資料の修復完了及びその返還を記念して、都立中央図書館1階ロビーにおいて、修復した郷土資料の現物と修復過程などをパネルで紹介するミニ展示「大津波からよみがえった郷土の宝」展を、平成27年2月20日から3月11日まで開催した。また、パネルの内容をまとめたリーフレット(英語訳を併記)を配布した。

郷土資料はその地域に住む人々の息づかいが

聞こえてくる資料である。今回修復した資料も、学童の文集や郷土史家が編集した「津浪記念碑」など昭和に出版された資料が大半であるが、どれも陸前高田を知るうえで貴重な記録である。そこで、私は「文化財」ではないけれど、あえて「郷土の宝」と呼んだ。



開催直前の2月19日のプレス向け内覧では、計9社の報道関係者が集まり（その後さらに5社が取材）、展示の内容と実際の作業の様子が報道され、3月4日にはテレビの生中継で修復の様子が放映された。また、陸前高田市立図書館の菅野館長も来館され、展示を鑑賞された。



この展示では、今までになかったような「出会い」もあった。

展示をご覧になった都内在住の方から「震災で亡くなった母が陸前高田市立図書館の元司書であり、父も同市の印刷会社の者で、父が印刷した本も展示されており、感激しました。これまで見た展示の中で一番人間味のあるもので、修復に携わった方々に心より感謝申し上げます。」という言葉をいただいた。また、3月10日には陸前高田市ご出身のご夫婦が展示を見に来られ、東日本大震災四周年にあたる3月11日に、犠牲になった方々全てに手向けてほしいと、献花のお申し出があった。

その後、展示パネルは、3月14日に岩手県一関で行われた「図書館総合展 2015 フォーラム in 一関」でも展示され、翌日、陸前高田に向かった。

#### 4. よみがえった郷土資料が故郷、陸前高田市へ

平成27年3月20日、陸前高田市役所において、郷土資料51点の返還セレモニーと返還資料の展示が報道各社9社の集まる中、行われた。陸前高田市、都立中央図書館、そして、日本図書館協会、岩手県立図書館の関係者が集まった。山田教育長からは、「本市だけが持つこれらの図書は、震災前の陸前高田を伝える上でも非常に貴重。地域の宝の大切さを改めて教えていただいた。本市にしかない資料が戻ってきて、将来への希望を与えていただいた」と謝意が述べられた。



#### 5. さいごに

実は、私は、岩手県での応急処置・デジタル化・紙焼き資料製作が終わった時点で、現物の修復は必要ないのではないかと思っていた。「資料保存」の理屈からすれば、それも当然ありう

る「合理的な」対応である。しかし今回の修復作業を通じて、様々な制約はあるものの、それだけでは割り切れない思いを私は強くした。郷土資料を残し、伝えていくということは「歴史」を伝えていくことであり、それは、そんなに単純な「理屈」ではないのではないかと。

個人的な感想になるが、陸前高田市での返還式で述べさせていただいた私の挨拶を紹介させていただきたい。

『先日3月14日に一関で行われた図書館総合展で、長谷川さん（陸前高田市立図書館員）のお話を聞きました。震災津波で職員、蔵書全てを失った、まさに絶望のふちから立ち上がり、歩まれている姿に胸が熱くなりました。本当に頭の下がる思いです。

それに比べれば、私たちのやっていることはほんの些細なことではありますが、震災から1年後の郷土資料発掘作業から始まって、これにも実に多くの人たちが関わっています。ここにも出席していただいている岩手県立図書館、日本図書館協会、県内の大学図書館関係者…

私はこの修復作業を行っているとき、いつも心に留めていたことが2つあります。

ひとつは…震災から1年半後に岩手県立博物館で行われた「応急処置」のときに、東京などから30人くらいボランティアが集まって、私もその一員として参加したのですが…3日間の作業を終えて最後に県立の澤口さんが挨拶をされて「みなさん、遠いとことをはるばる来ていただいて…」あとは言葉にならず涙を流されました。澤口さん、泣いたよね…この間、発掘作業に行かれた人にその話をしていたら「澤口さん、発掘のときも泣いてた…」

もうひとつは、ちょうど私たちがこの資料を引き受ける頃、震災から2年半後の頃、朝日新聞の別刷でたまたま陸前高田の図書館が取り上げられていて、ようやく図書館活動を再開して、子どもたちや地域の人たちに憩いの場を提供して…みたいな記事で、最後にこれからの陸高の図書館、どうしていきますか？みたいな質問に、長谷川さんが「郷土資料をもう一度集めます。陸前高田の歴史を残し、伝えていきたい」ときっぱりとおっしゃっているんですね。

そういう図書館、図書館員の人たちの思いに何とか応えたいという一心でやってきました。そして、ドロドロだった資料がだんだん再生していくのを見ると、一冊一冊が本当にいとしくて…これは全員犠牲になった図書館員たちの形見だなあと思いました。

震災津波で実に多くのものを失った。でも、だからこそ、見えてきたものがあります。それは、図書館の本来の使命、図書館員たちの思い、魂とっていいかもしれない…志です。それこそが、瓦礫のなかに残されて輝いていた宝物です。

そのことに改めて気づかせていただきました。ありがとうございました。』

そして、長谷川さんは修復された手書きの貸出票に見覚えのある筆跡を見つけ、「郷土の歴史だけでなく、亡くなった人たちの気持ちも形見として引き継ぐのが私たちの使命」と語られた。

都立中央図書館では、今も被災資料の修復を継続している。第2次受入資料について、平成29年3月の返還をめざし、再生に向けた作業を行っている。

また、記録DVD（動画）を作成した。今後何らかの形でネット環境でもみることができるようにする予定である。

(\*1) 「陸前高田市立図書館郷土資料救済支援活動（第二期）報告」宮原みゆき（「ネットワーク資料保存」第101号、2012.7）

(\*2) 「いわて高等教育コンソーシアム「被災地の図書修復及び整備についての研究チーム」の活動報告—陸前高田市立図書館郷土資料救済の取り組みについて—」千錫烈（「図書館雑誌」2013.3）

(\*3) 東京都立図書館ホームページ  
トップページ > 都立図書館について > 資料収集・保存について > 資料保存のページ > 陸前高田市立図書館被災資料の修復

（しんの せつお・東京都立中央図書館）